

「第Ⅰ部へのアプローチ」ウルのスタンダードから問いをつくる

——問いの構築学習の試み

宮本 英征

地域世界の歴史的特質についての学習に見通しを立てる

世界史探究の学習指導要領・大項目Bの最初に設けられた項目(1)「諸地域の歴史的特質への問い」では、生業、身分・階級、王権、宗教、文化・思想などの観点をふまえながら資料を考察し、これから学ぶ古代文明や諸地域の歴史的特質について興味・関心や疑問、追究してみたいことを見出す。そして、これらのことを生徒自身が問いとして表現することをもとめている。この活動は、生徒が地域世界の歴史的特質についての学習に見通しを立てることを目的としている。

この項目B(1)の主旨をふまえているのが、『高校世界史』(世探705)「第Ⅰ部へのアプローチ」である。本書にはウルのスタンダードが掲載され、古代の人々の活動について考察するための発問が用意されている。

Q1 人々はどのような仕事に従事し、どのような生活を送っていたのだろうか。たとえば、図b・図fの人々はどのような生活を営んでいるか考えよう。ほかにも興味のある人物をあげてみよう。

Q2 どのような身分の人がいるだろうか。たとえば、図a・図gの人々はどのような身分だと考えられるだろうか。2人とは異なる身分だと思ふ人物もあげてみよう。

Q3 図eは剃髪した人物や楽師、男性歌手が描かれていることから、宗教的な集まりである

と考えられている。人々は神に何を願い、また、感謝したのだろうか。

Q4 図aと図cの王は何をしているのだろうか。

王にはどのような役割があったのだろうか。

Q5 さらに調べたいことを問いにしてみよう。

これらの発問は、生業、身分・階級など諸地域の歴史的特質を読み解く観点をふまえたものである。Q1は戦いや農耕・牧畜、音楽の演奏など人々の生業を読み解かせる。Q2は、王・貴族のような富裕者、戦士、農民、運搬を担っている人物など身分に注目させる。Q3は、豊穡の願いなど神への信仰について想像させることで宗教について考察させる。Q4は、王が戦いのリーダーであると同時に豊穡の祈願や収穫への感謝など宗教的儀式の主催者であるなど王権の働きに気付かせる。これらの問いを生徒に投げかけて資料に興味をもたせ、教員が解説してもよいし、インターネットなどで調べ、プリントなどにまとめさせても面白い。ウルのスタンダードを多様な観点から読み解いたあとに、興味をもったことや不思議だと思った点、さらに調べたいことなどを生徒に意識させ、Q5の問いを表現する活動に取り組みたい。

問いを表現する活動は、生徒にとっては不慣れで難しい場合も多い。歴史総合などで十分に活動させておきたい。また、ウルのスタンダードを読み解いたあとに問いを表現させると、「「戦争の場面」下段の半ロバの背についているものは何か」など資料に直接かかわるものや、「メソポタミアの都市の様子について調べてみたい」のような古代

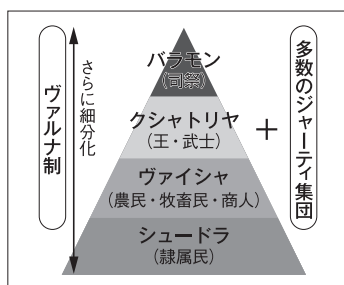


図1 カースト制度

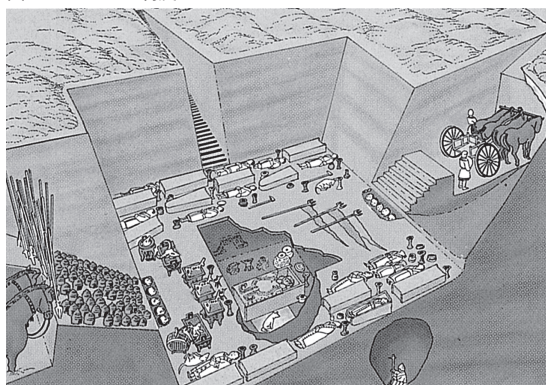


図2 殷墟の絵図

メソポタミア地方など時代・地域が限定的なものに留まりがちである。問いを表現させる目的は、これから学ぶ古代文明や諸地域についての課題意識や学習への見通しをもたせることである。ほかの時代・地域の資料を用意して視野を広げ、改めて問いを表現させることも考えたい。

たとえば、本書のカースト制度の図版(p.36、図1)で古代南アジアの身分・階級を紹介して司祭階級が頂点にいることに疑問を感じさせたり、殷墟の図版(p.38、図2)で多くの殉死者に気付かせ、東アジアの王権の強大さに興味をもたせたりすることもできる。また、生徒が自分の表現した問いに回答するために、どのような学びが必要かを追究させたい。「つかった問いを解決するために、どの時代・地域の学習が重要だろうか」「ほかの時代・地域と比較したり、分類したりする必要があるだろうか」「どのような観点に着目して学習したらよいだろうか」などの発問を投げかけると、生徒が具体的に考えやすい。

地域世界の歴史的特質を読み解く観点を追究する

「第Ⅰ部へのアプローチ」で問いを表現する目的は、地域世界の歴史的特質の学習への課題意識とその学習への見通しを立てることにある。しかし、それだけではない。もう1つの目的は、問いを表現することで、生業、身分・階級など諸地域の歴史的特質を読み解く観点について考察し、網羅的羅列的になりがちな歴史的特質を構造的にとらえることができる点に気付かせることにある。そのため、ウルのスタンダードを読み解いて表現した問いを、明確に観点にもとづくものへとつくり直す学習活動を組織するような工夫もおこないたい。

たとえば、Q4に着目して「王権」にもとづく問いを表現させ、ブラッシュアップしていくこともできる。授業においては、「第Ⅰ部へのアプローチ」のリード文なども参考にしつつ、「戦争の場面」の下段はロバ4頭に引かれた戦車が敵兵らしき者をふみつぶして進軍する場面であること、中段は槍をもつ兵が上段へと連なる捕虜の背後を威嚇しながら歩いている場面であること、上段は中央の人物(王)が捕虜を接見している場面であることを読み解かせる。そうすることで、王が戦いのリーダーであり、都市を拡大したり防衛したりする中心であったことを理解させる。また、「平和の場面」の下段と中段では、胸に両手をあわせた(服従の身ぶりをした)人物が、戦争捕虜に穀物の入った荷袋や家畜、魚などを運ばせている場面であることを読み解かせる。上段は、楽人が手琴をかなで、歌い手が唱和するなかで、手にビールの杯をもつ人々が描かれている。生徒の多くが「戦争の場面」と結びつけて戦勝の宴として認識することが多い。また、税を徴収する場面と考えるものもある。最近の研究ではQ3のように宗教的な祭儀、とくに、神への豊饒の祈願や収穫への感謝にかかわる場面として解釈されていることを説明する。王は神とともに、支配領域内の生活の安定・向上を保障す

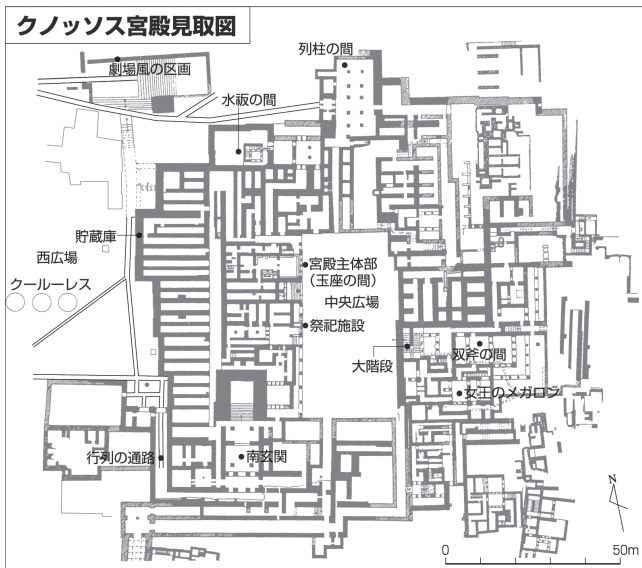


図3 クノッソス宮殿の見取図(周藤芳幸編『世界歴史の旅 ギリシア』〈山川出版社、2003年〉p.170)



図4 アウグストゥス帝の像

る存在であったことを理解させる。そして、王の役割は戦いのリーダーであり、また、人々の生活の安定・向上であったことをふまえ、最初の問いを表現させる。

それから、その問いをブラッシュアップするために、図3のクレタ文明・クノッソス宮殿の見取図を紹介する。クレタ文明の宮殿は石を敷きつめた長方形の中庭を取り囲むように、王・支配者の居住区、貯蔵庫、工房などの建物が配置された。祭司的な性格の強かった支配者の住む場所であるとともに、貢納というかたちで徴収した生産物を広大な貯蔵庫で保管・管理し適宜分配することで、王・支配者の権威を維持した。未解読の線文字Aも再分配を円滑におこなうために用いられたと考えられている。その代表的な宮殿が迷宮伝説で知られているクノッソス宮殿であり、その貯蔵庫は最大1万8千人分の食料を供給可能であった。

授業では、クノッソス宮殿の見取図から、大規模な貯蔵庫の存在に気付く。そして、その働きを探究する。自然環境からどのような物質が蓄えられていたか考えても面白い(ブドウ酒、オリーブ油、羊毛など)。そして、王・支配者の役割が祭司的

な性格とともに物資の再分配という経済活動にあることを理解する。ウルのスタンダードの読み解きで獲得した王権の役割に経済活動の主体という新しい役割をふまえて、改めて問いを表現する。

生徒は、王権という観点で資料の考察を繰り返しておこない、問いをブラッシュアップしていくことで、観点を意識できるようになる。また、「第I部へのアプローチ」では、王権以外の生業、身分・階級、宗教などの観点で読み解きをおこなえるようになっている。新しい資料を用意し、ほかの観点から問いをブラッシュアップする授業も開発したい。

観点「王権」で何を読み取らせ、 問いを表現させるのか

王権を観点にして問いをブラッシュアップする授業を提案した。それは、王権を意識することで、これから学ぶ歴史的特質を構造的にとらえることができることに気付かせるためであった。しかし、歴史的特質を構造的にとらえさせるだけで十分なのだろうか。前節のように王権を観点にして、問いをブラッシュアップしたあと、さらに①から⑥

のように授業を展開することができる。

- ①ウルのスタンダードで、「王」とした人物の根拠をたずねる。生徒はほかの人々より大きく描かれている人物を王として判断するだろう。
- ②この地域の王の称号の1つが「ルガル」であり、「大きい人」という意味であることを紹介し、王が大きく描かれた理由を問う。生徒は財力、権力、軍事力が他者より優っているイメージを表していると説明する。
- ③王を大きく描かせた人物(おそらく王)の意図をたずねる。生徒は他者より優れている王のイメージを人々に定着させようとする意図に気付くだろう。
- ④図4のアウグストゥス帝の像とそのキャプション(p.73)を提示し、250体の理想化された皇帝像をローマ帝国全域に配置した理由を読み解かせる。生徒はアウグストゥス帝が帝国統治者としてのイメージを人々に定着させようとする意図に気付くだろう。
- ⑤王・支配者・権力者の表象(イメージ化)とその影響について、生徒自身に心当たりがないかをたずねる。王権を観点にして、現代社会や生徒自身と歴史的特質を結びつけさせる。
- ⑥ウルのスタンダードで認識した王の役割、クッソス宮殿で認識した王の役割、そして、スタンダードやアウグストゥス帝の像で認識した王の表象(イメージ化)をふまえて、改めて、問いを表現させる。

おわりに——問いの構築学習の試み

問いを表現する活動は、地域世界の歴史的特質の学習への課題意識や見通しをもたせたり、王権などの観点を意識させ歴史的特質を構造的にとらえさせたりするためにおこなう。しかし、それだけに留まらず、王権などの観点によって、現代社会や生徒自身と歴史的特質を結びつけることができる。

そのためには問いを表現するのではなく、問いを繰り返しつくり直す問いの構築学習を試みる必要がある。

歴史総合における問いを表現する活動とは異なり、探究科目における活動は、問いを「新たに練り直す」ことを重視するべきであり、どのように練り直すかについて、さらに授業研究が必要であろう。(みやもと・ひでゆき／玉川大学教育学部准教授)